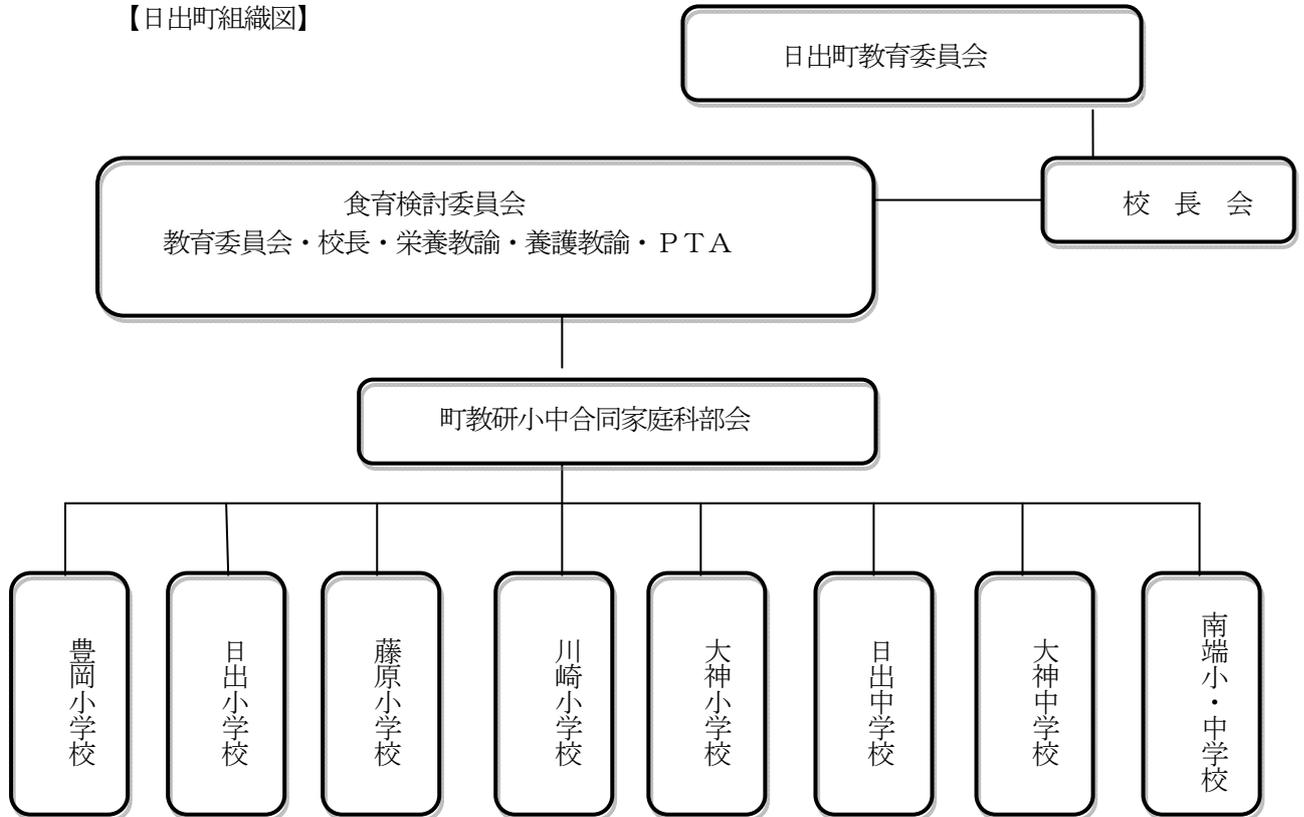


再委託先名

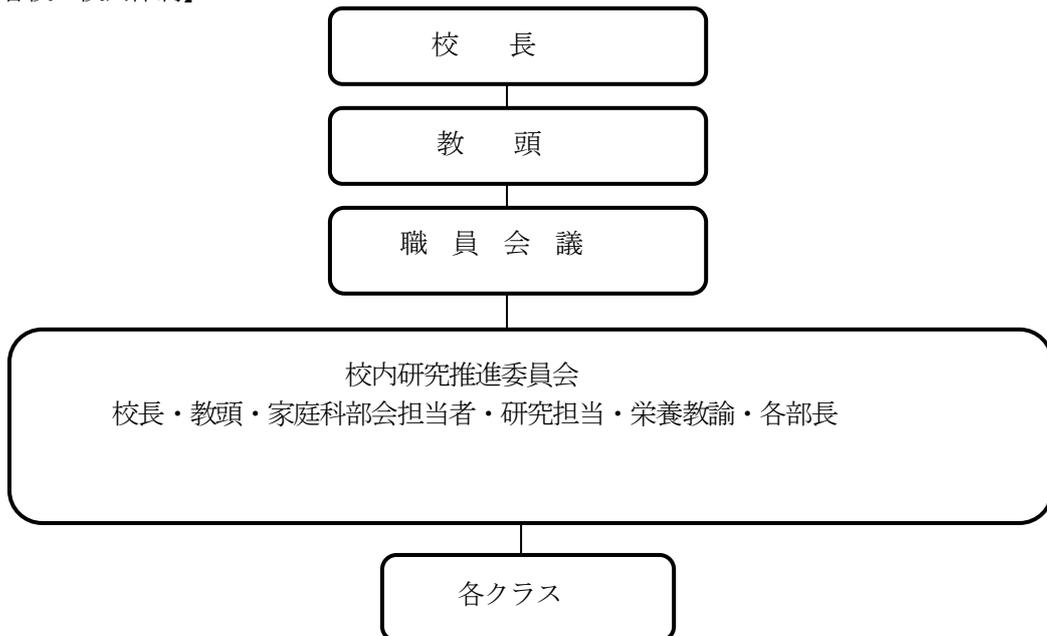
日出町

1. 事業推進の体制

【日出町組織図】



【各校・校内体制】



2. 具体的取組等について

テーマ1

日出町の小・中学校における食に関する指導の充実のための取り組み

- 栄養教諭は校長会・食育検討委員会と連携し、実践中心校や実践協力校で年間指導計画に基づく食に関する指導計画を立て、町教研小中合同家庭科部会で具体的計画を作成した。
- 栄養教諭が昨年実施した食に関する指導案を、各学年の発達段階に応じた内容にした。さらに日出町の児童生徒に実施したアンケートの分析結果をもとに、町教研小中合同家庭科部会で内容を検討し、企画・立案できた指導案を実践協力校に提示した。

- 実践中心校・川崎小学校で校内研公開授業を3回実施。

第1回 3年 学級活動

「朝ごはん目覚ましスイッチオン」

1日の活動を元気にスタートさせることができるように朝ごはんをバランスよく食べると、あたま・体・おなかにスイッチが入ることを学習

第2回 2年 生活科

「パン工場で見つけたこと」

地域を知るためにパン工場に見学に行き、そこで見たパンの不思議や作る人の思いなどを考え、感謝して食べることに繋げる。

第3回 5年生 総合的な学習

「チャレンジ米づくり」ふり返ろう、米づくり

1年間を通した総合的な学習最後のまとめの時間で、米について自分たちでわかったことを「米事典」にまとめるために、話し合いを深めるなかで米のすばらしさに改めて気づく。



第1回公開授業



第3回公開授業

- 協力校での実践例



その他の協力校の実践

「朝食を食べよう」「給食センター見学をまえに」「やさいはかせになろう」「1日分の食事について考えよう」等

日出中学校 1年生 学級活動 「望ましい食習慣とは」

担任が事前にとったアンケートの結果から中学生に必要な生活習慣や食生活の大切さを指導。そして栄養教諭が専門的な知識を生かし、グラフや写真を使いながら説明していった。

中学生の時期が生涯の中で一番栄養（エネルギー・タンパク質・カルシウム等）が必要。給食は1日の栄養の1/3以上をとるように考えられていることなどを図やグラフで説明。

《生徒の感想より》 今日の授業で私は今まで何回完食したかな？とかぞえました。よく考えてみると、残した数の方が多いと思いました。どれほどカルシウムやタンパク質が大切なのかも知ったので完食する回数を増やしたいです。

豊岡小学校 6年生 学級活動 「おやつを考えよう」

児童にとって身近な「おやつ」について、栄養教諭はスナック菓子に含まれる脂の量をみせ、生活習慣病の怖さについて知らせ、これからどのようにおやつを摂ればよいか具体的に学習させた。

○実践中心校では栄養教諭を中心に、学級担任と連携しPTAの公開授業等で食に関する授業を公開。指導媒体を利用することで効果的な授業を行い、保護者や地域の方々への啓発に努めた。

- 1年生 生活科 「やさいはかせになろう」
ブラックボックスを使用し、当日の給食に使用されている「人参・たまねぎ・じゃがいも」を手で触って当てる。
見ている児童も、その野菜について知っていることをヒントとして知らせる。身近な野菜について興味・関心をもつ。
- 2年生 総合的な学習 「バターのお宝を探そう」
- 3年生 道徳 「いただきます」
- 4年生 学級活動 「旬を知ろう」
食生活教材中学年用を使用し、旬についての学習。
1年間の給食の献立表を利用しどんな野菜や果物が使われているのかを班活動で見つける。
栄養教諭から旬の説明を聞き旬の良さを知る。
- 5年生 総合 「食べ物はどこから来ているのかな」
学級活動 「いただきますについて考えよう」
人権的視点に立った「食育」。教材として絵本「きみの家にも牛がいる」を使い「命をいただいて人間は生きていること、その命に感謝して大切にたべなければならないこと」を学習。



1年生「野菜はかせに・・・」



4年生「旬を知ろう」



5年生「いただきますに・・・」

授業のあとに寄せられた保護者の感想

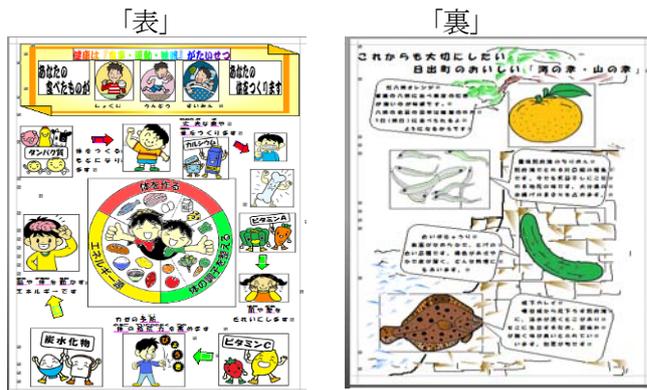
おうちの方にメッセージをいただきました。

私も先生の読み聞かせを聞いて牛はすごいと思いました。命を頂くといい皆の意見を聞いてとても感動しました。これからも自分達が「食べる」ことで「たくさん命をいただく」と思っ心こめて「いただきます」を言いましょう。
好き嫌いせず何でも感謝して食べましょうね。 母

- 6年生 学級活動 おやつとり方を考えよう
- 学級活動 苦手な給食を克服しよう

3～6年 PTA公開授業で食育 外部講師をお招きし「親子食育講演会」の実施

食育下敷きの作成



食育下敷きとは・・・

学んだ事を身近において、毎日の食生活（特に朝食について）を振り返る。

3・4年生で学んだ「朝ごはん目覚ましスイッチオン」を下敷きにすることで、朝食の大切さを各学年でもう一度確認する。

また、裏面の「郷土の食材」については、いつまでも地元の味を忘れないでほしいとの思いを込めて作成。

(町内の小学生全員に配布)

テーマ1～2に共通する具体的計画

1、「食育という言葉を知っていますか、関心はありますか」

「食育」という言葉はある程度知られている。(保護者の95%以上)

また、「少しある」も含めて、関心がある保護者は約99%。

しかし、個別に見ると、「食育という言葉を知らない」と「関心がぜんぜんない」が同じ回答と思われる。

「食育(食・食べること・食べ物)」に関心や興味のある保護者が多い。

「食育」という言葉だけが一人歩きしていたり、言葉のみに終わってしまわないよう授業や通信等で「食に関すること」について発信していく必要がある。



言葉の理解から内容の関心に向かうよう工夫する必要がある。

2、「食事に」気をくばっていることは

多くの家庭(約77%)が、家族の健康を一番に考えていた。

しかし、9～15%の家庭で子どもの嗜好にあわせて食事が考えられていた。

子どもの嗜好は時として大切にする必要もあるが、幼い時から色々な食の経験が必要である。見たことがない・食べたことがないより、見たことがある・食べたことはあるけど・・・という食体験は今必要である。

(買い物の経験が少ないため「食材」と「名前」が一致しない児童が増えているような気がする。)



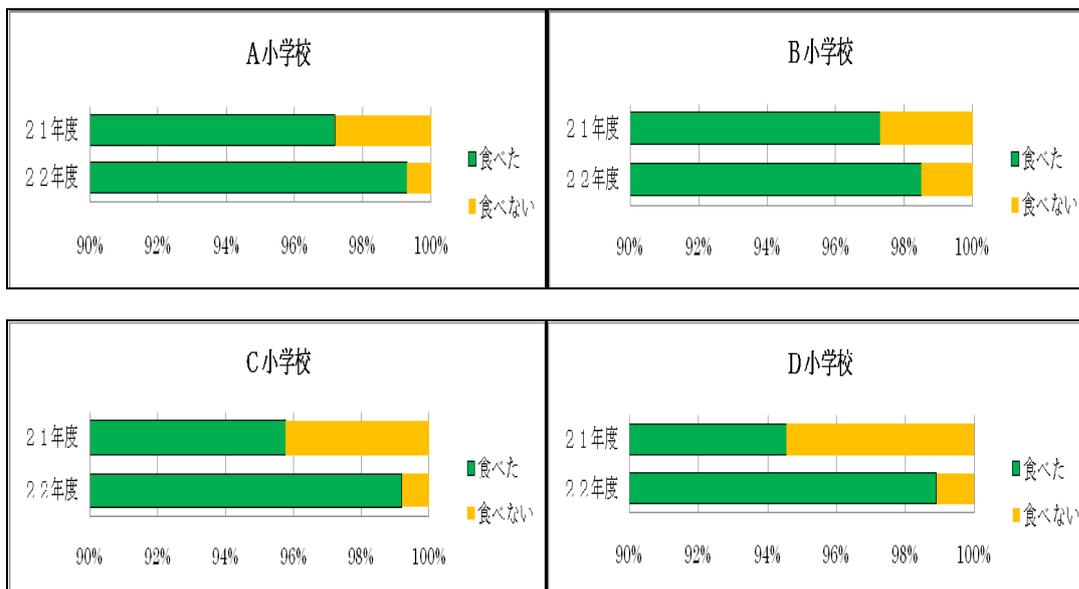
通信等で家庭で作ってほしいメニュー等の紹介を多くしていきたい。

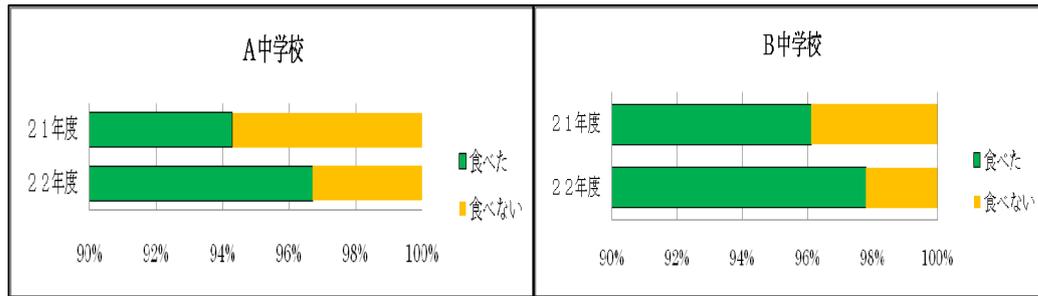
数字で変化のあった事項について

朝食の摂取状況

平成21・22年度の各小中学校における朝食摂取状況について

(平成21年度は5月実施・平成22年度は23年1月実施)





各小中学校とも朝食の摂取状況において改善されている

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 1, PTA公開授業日に、実践中心校で多くの学級で「食育」の授業が行われたことで、保護者に興味関心をもってもらうことができた。また、地域の栄養教諭・学校栄養職員にも校内研公開授業参加を呼びかけ、授業後に多くの意見をいただいた。

授業後の感想より

- 担任が行う授業に、栄養教諭が自然な形で参画している。
- いつもの授業に「食育の視点」をもつことで、無理なく食育が行われている。

- 2, 1つの学校だけでなく、地域指定のため栄養教諭が各学校に出向き「食育」を広めることができた。授業の実践を教職員に伝える「食育実践通信」を随時発行し、中心校の授業内容を参加することのできない教職員にも伝えることができた。

実践通信への感想より

- 実践中心校をはじめ協力校の食育の様子を知ることができました。これからの参考にしたいです。
- 食育についての理解を深めることができました。

- 3, 毎月、全家庭向け「食育つうしん」発行（食育の情報発信）

保護者の声より

いろいろなお話いつもありがとうございます。
講習会（料理）などがあると参加したいです。

- 4, 「つうしん」を利用して各学級での食育活動。

実践協力校では、食育通信を家庭に配布するだけでなく、給食時間等を利用し「つうしん」の内容を児童生徒にわかりやすく話して聞かせるなどの取り組みが行われた。



7月発行「食育つうしん」

実践協力校の担任より

「食育つうしん」を家庭にくばるだけでなく、大切なことはわかりやすく読んで児童に聞かせました。自分自身も「食育」については知らないことが多かったので勉強になりました。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 日出町では平成21年度に栄養教諭が配置され、1年を通して町内の小・中学校で「食育」の授業実践が行われた。その結果、学校現場で「食育」という言葉がある程度浸透してきた。平成22年度は「栄養教諭を中核とする食育推進事業」の地域指定を受けることで、実践中心校では、今まで「食育」になじみのなかった教職員も校内研究で研修を深め、栄養教諭とT・Tで授業を行ったり、公開授業日には多くのクラスで「食育」が行われたりして、保護者にも好評を得た。また、実践協力校においても、栄養教諭の提示する資料を参考に授業を行うことができた。

<学校現場>では

・実践中心校では各学年・学級全てで食育の授業が行われたのに対し、実践協力校では一部の学級でしか授業が行われなかった。これは、昨年行われた「食育」が、栄養教諭が中心として行った授業に対し、今年度は各担任と栄養教諭が連携して行うT・Tの学習内容であり、授業研究等の打合せの時間が十分取れなかったことが原因と言える。さらに、「食育」そのものが時間を新たに確保して行う授業と思われたため、時間を新たに確保する事への抵抗があったと思われる。「食育」を推進するためには、今ある授業の中に「食育の視点を盛り込む」ことを今以上に各教職員と共通理解する必要がある。そして、多くの学校で「食育」を実践するには、各担任と栄養教諭が連携して授業研究を行う時間の確保と、栄養教諭が各学校を訪問する年間スケジュールを年度初めに計画的に作成する事が急務である。

今回、「チャレンジ米づくり」の実践（5年 総合的な学習）から、具体的な農業体験を通して学ぶことが、子どもの食への思いをじっくり確実に育てていくことがはっきりした。このことから、次年度の教育課程・食育全体計画や指導内容作成にあたっては、「飼育」「栽培」「調理」などの体験活動を積極的に取り入れるなど、栄養教諭より実践事例を示していくとともに、食育の指導内容では、「これだけは押さえておきたい食育内容」と「学級の実態に応じた食育内容」の2つを重点に一覧表を作成し、それを位置づけてもらうようにする。

<家庭との連携>では

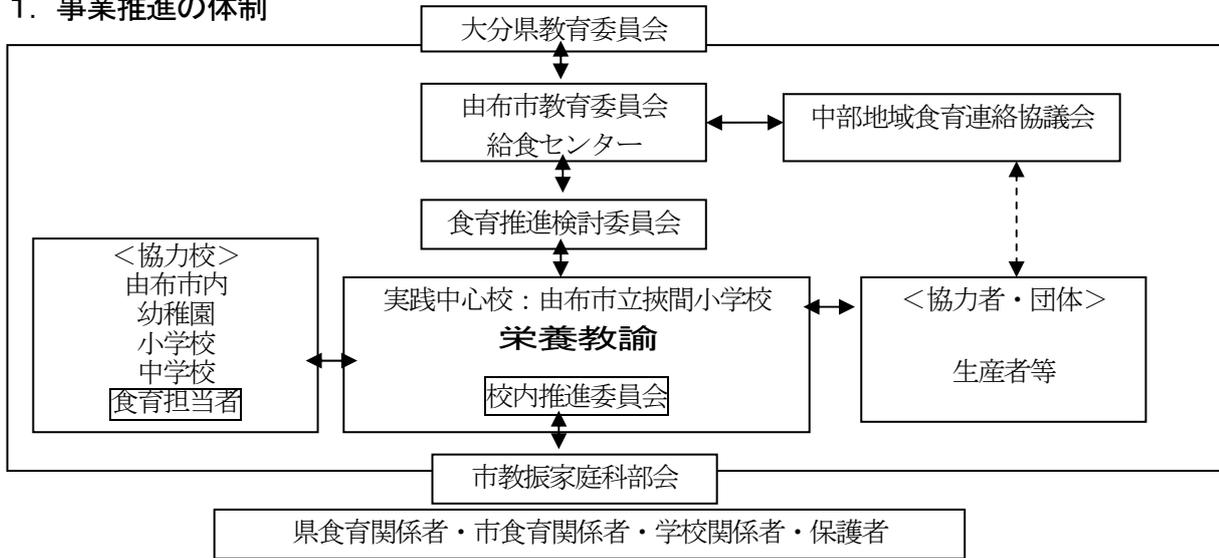
・実践中心校で行ったPTA授業後の保護者からいただいた感想には「食べ物の大切さをあらためて感じました。子どもと食についてこれからも学んでいきたい」等の意見が多く寄せられた。「食育」の授業を初めて見た保護者からも多くの関心が寄せられ、あらためて「食の重要性」を認識していただいた。11月には実践中心校でPTA対象の「親子食育講演会」さらに町主催で「食育講演会」が開催されるなど「学校と家庭との食を通じた連携」がよりいっそう深まったと思われる。

・毎年各学校で実施する給食試食会等を通じて「食育」をさらに保護者に関心を持ってもらいたい。試食会の時間設定だけでなく「食育」の話題を広める設定を行うようPTA活動に働きかけ保護者との連携を深めていきたい。まだまだ試食会の参加者が少ないので、より多くの参加をお願いするために毎月発行する「食育つうしん」等と呼びかけるだけでなく、保護者からの意見も多く集めることにより、情報の発信が一方向的にならないようにしたい。

再委託先名

由布市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 市内各校における食育を充実させる取組

○食育実践の組織作り

市内各園、各学校1名ずつ食育担当者を決め、栄養教諭の派遣申請等の組織作りを行った。
市教育委員会が食育担当者からの派遣依頼をとりまとめ、栄養教諭を派遣し授業実践等を行った。
食育担当者が集まり、情報交換を行うことで実践が市内に広がっていった。

・食育実践例

(幼) エプロンシアターを活用してはやね、はやおき、あさごはんの大切さの話

(小) 家庭科の授業での食の専門家としての話（データ等を活用）
バランスよく食べることの大切さの話

(小・中)家庭科の授業での食の専門家としての話（データ等を活用）

(中) 職業講話

(保護者)朝ごはんの大切さの話



○既存の組織の活用による教科（家庭科）での教諭との連携

由布市教育振興会家庭科部会に栄養教諭が所属し、九州地区小学校家庭科教育研究大会の大分大会では栄養教諭が指導案審議に参加するとともに、家庭科の授業で担任と連携しながら授業に参画した。

・大会当日の実践例

6年生家庭科

『見直そう「バランスがな狭間っ子弁当」の献立』で、
バランスについてのアドバイスを行った



○実践中心校での取り組み

校内研修の専門部会「食育部会」を新たに作り、各学年の担当者と連携し指導資料作成や、食に関する指導等を行った。

・実践例

九州地区小学校家庭科研究大会の日に、狭間小の全ての学級で食に関する授業を行った。



食育の授業をした後、図工でお弁当づくり



音楽「やさいのおみせ」



やせうまの発表

テーマ2

学校と家庭が連携して取り組む食育の推進

○PTAと連携した活動

- ・食育講演会の開催・・・県内から講師を招いて、子育て中の保護者に向けた自然食について等の講演を開催した
- ・給食試食会・・・試食会を活用し、保護者に朝ごはんの大切さの話をを行った。

○夏休み簡単料理教室

・夏休みに自分たちで昼食を作ってもらいたいという思いから、簡単に作れる料理の教室を夏休みに実施。子どもたちからは、「みんなと楽しくでき、とてもおいしかった。家でも作ってみたいと思う。」などの感想があった。



○たより（通信）等により家庭への啓発を行った

テーマ3

体験活動を通じた地域の産物、産業等の理解を促進する取組

○地域を活用した農林水産業体験学習を実施する。

- ・さつまいも、大豆、小豆、米、ほうれん草、など各学年に応じた農作物の体験学習を実施した。

○生産者訪問及び啓発資料を作成する。



○子どもが育てた産物や地元の生産物を行事や調理実習等に利用し、地域の産物の良さについて理解を深めた。

- ・実践例「ほうれん草を使ったおかず」「やせうま作り」

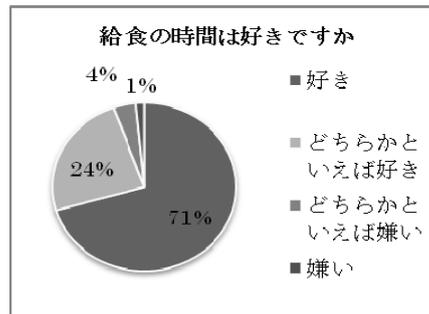


テーマ1～3に共通する具体的計画

○食に関する実態調査の実施

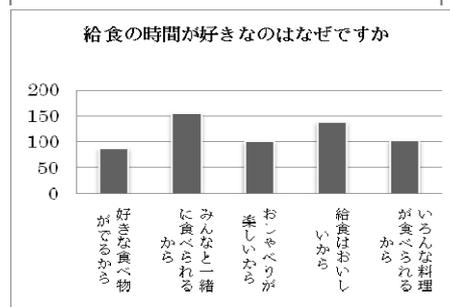
- ・給食の時間は好きですか

すき	70.5%
どちらかといえば好き	24.0%
どちらかといえば嫌い	4.0%
嫌い	1.5%



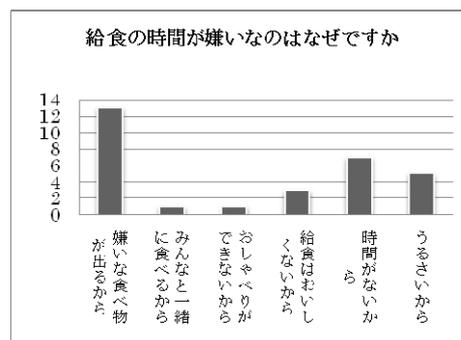
- ・給食の時間が好きなのはなぜですか

好きな食べ物がでるから	26.8%
みんなと一緒に食べられるから	47.7%
おしゃべりが楽しいから	31.1%
給食はおいしいから	42.5%
いろいろな料理が食べられるから	31.7%



- ・給食の時間が嫌いなのはなぜですか

嫌いな食べ物が出るから	4.0%
みんなと一緒に食べるから	0.3%
おしゃべりができないから	0.3%
給食はおいしくないから	0.9%
時間がないから	2.2%
うるさいから	1.5%



○嫌いな食べ物が出るから給食時間は嫌いと答える子どもが多かったが、給食時間にみんなと一緒に食べられるから好きと答える子も多かった。そこで、給食時間のひとくち話や、通信、掲示等の取り組み、給食時間の訪問等により、子どもたちへの話題提供ができ、給食時間を楽しくし、嫌いな食べ物でもつい食べてしまうような環境作りを進めていきたいと考えた。

実践例

- ・給食時間の指導に活用できる資料の配布

地場産物を活用した給食の時等に資料を配布

毎日1つ給食に関する「給食ひとくち話」を作り各校・園へ配布。給食時間に放送するなど活用された。

- ・掲示資料の工夫

触って楽しみながら食について勉強ができるように掲示を工夫した。

栄養クイズ、ジュースの砂糖量、たべものクイズ等



数字で変化のあった事項について

○各園・小・中学校での栄養教諭活用状況（教科・特別活動・PTA 関係）

平成21年度 **3校** → 平成22年度 **19校**

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

○食育実践の組織作り

組織のなかった昨年は、栄養教諭を活用した食に関する指導の場面は少なかった。今年度、食育実践の組織作りとして、食育担当者を決めたこと、そして市教委が栄養教諭の派遣申請をとりまとめたこと等により、栄養教諭の所属校以外の学校への派遣がスムーズに行えた。また、既存の組織である由布市教育振興会家庭科部会に所属したことで、担任の先生とのつながりができた。

○教科担任との連携

家庭科の食領域で、教科担任と連携をとりながら栄養教諭がTTで授業に参画し、専門的でデータに基づいた資料等を活用したところ、子どもたちの理解が高まり、効果的な授業を行うことができた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

○由布市全体で8園、18校全体の食育を栄養教諭・栄養職員2名で行うことは不可能なので、人員を確保していくとともに、短い時間の中でも効果的に活用できる方法を探していく必要がある。

○今年度の事業により食育に関する取り組みは広がってきたが、市全体で見るとまだ足りない。これからも食育を各園・学校へ広めていくとともに、担任が給食時間等を利用して手軽に食に関する指導ができるような教材作りにも取り組んでいく必要がある。